
mader?

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
m a d e r ?

【Nコード】
N 1 5 3 1 J

【作者名】
東雲咲夜

【あらすじ】
ある日、町で暇をもてあましている男がいました。
そんな男は、数人の男たちに周りを囲まれます。
その中には知り合いも混じっていました。
彼らの用件は——「殺させてもらう」

この日、俺は町でぶらぶらと暇をもてあましていた。

メルチェックなどをしてみたが、誰からも何の連絡もなく。

買い物しようかとも思ったが、特に必要なものもなく。

掲示板を覗いてみても、興味の無い書き込みばかりで。

遊びにでもいかないかと何人かの友人に連絡したが、返事がないままだった。

だからといって、町を歩く人をナンパしてみるほど度胸もない俺。

「何か面白いことでもねーかな……」

こういうとき、かわいい女の子にでも話しかけられればいいのに。逆ナンみたいなきもちでさ。

そんな俺の小さな願いは叶うはずもなく。俺の周りに集まってきたのは、数人の男たちだった。

俺はそいつらの顔を見てみたが、見覚えはない。ただ単に俺が忘れているだけかもしれないが。

「何……俺になんか用でもあんのか？」

ほんの少しの警戒を含ませてかけた問いに返ってきた返事は。

「お前さ、ケイ？」

Kっていったい何のことだ……と馬鹿みたいに一瞬考えてから、それは俺の名前だということに気が付いた。

自分の名前なんて普段意識していないから、なんだかわからなかったというわけだ。

「そうだけど……あんた誰？」

「おいおい——忘れたとはいわせないぞ？　ほら、オレだよオレ。カズヤだよ」

頭の中にある記憶と、今日の前にいるカズヤという名前と外見を照らし合わせてみる。

数秒後、俺の中で思い出したことがあった。たしか、ずいぶん前

に知り合ったやつのような気がする。

そのときのカズヤは、もっと弱い外見だった気がするんだが、今日の前にいる男は、がっしりとしていて、随分と強そうに見える。

「ああ——お前か！ 随分と久しぶりだな。最近全然あってなかったじゃん」

「お前の噂聞いたから、ちょっと出てきたんだよ」

「ふーん。それで、他の人たちは誰？」

「やっぱり覚えてないんだな……ユウジと、キョウヤと、シュンだよ」

再び記憶と照らし合わせてみるが、さっぱり覚えがない。なんというか、よくある名前であらねえ。

過去にあったことはあるのかもしれないが、あまり仲がいいわけではなかったんじゃないだろうか。

男友達なんて、そんなもんだろ？

「うっかりしてただけだって。この俺様がダチのこと忘れるはずないじゃんか。で、用あんの？」

相変わらずだな、とケンジがぼやいていたが俺は見ない振りをした。

「まあ、用っていうほどのことじゃないんだけどな。ケンカしにきただけさ」

「ケンカあ？ おいおい、俺一人にお前達かよ。随分と卑怯じゃねえか」

「卑怯？ お前がいえる立場じゃないだろうに。こっちはずいぶんとストレスが溜まってるとだよ」

カズヤと話している間にも、後の二人に俺は囲まれていた。

「で……殴り合いでもするわけ？ それなら大歓迎だけど」

俺がそういうと、近くにいたシュンってやつが鼻で笑いやがった。

「殴り合いなんかじゃ、おれの気は済まない……」

少しイラついている様子のキョウヤがそういった。

「あいつらもそういつてるからさ……殺させてもらう」

そういうなり男たちは、腰元から剣を抜いて、俺に突きつけた。

「おいおいっ……マジかよ!？」

だいたい街中で剣だすとか禁止だろ!？」

そんなことを考えているうちに、ケンジの後ろで銃を構えているユウジが見えて、俺は慌てて駆け出した。

できうる限りの全速力で街から、男達から俺は逃げる。

いきなり刃物を振り回すなんて、正気じゃない。これから殺すなんて宣言も。

でも、少し楽しいと思っっている俺も……イカれてるけどな。

にやりと口元を歪めながらも、俺は走り続ける。

俺は町から離れて、林へと逃げ込む。少しはまけたかと思ったが、相変わらず銃撃は続いていた。

「前から、一回人殺したかったんだよなあ!!」

物騒なセリフと共に、カズヤが切り込んできて、俺はぎりぎりですぐ避けた。

追われるのは嫌いじゃないが、今の俺は丸腰だ。どうみたって勝てやしない。

避けた勢いで、俺は木の根に引っかかって転んでしまった。

数メートル転がった俺が立ち上がろうとすると、すぐ側に剣が突き立てられた。

「チェックメイト、だな……ケイ？」

そういいながら俺を見下ろすカズヤの顔には笑みが刻まれている。見ているだけで、いらいらしてくる。

二つの剣と、一つの銃が俺に狙いを定めていた。

「あー。ここで思いとどまったり……しないよなあ」

カズヤへ向けてというより、俺自身に向けてのボヤキ。

「当たり前だろ」

そして、嫌な音と共に俺の視界は暗転した――

暗転するときの残像が目に残って、チカチカした。

舌打ちをしながら俺はディスプレイをつけなおして、キーボードへと指を走らせた。

たったいま、俺を殺したばかりのやつらへと向けて。

『まったく……本当に殺してくれやがって』

メッセージを飛ばすと、カズヤからすぐに返事が返ってきた。

『元はといえば、お前が悪いんだから自業自得だろ』

『いったい俺が何したってんだよ？』

『お前なあ……やっぱり変わってないな。散々オレのアイテムやら何やら持ってたおいて』

『ああ？ アレはお前から借りただけだろう』

『借りたら返すのが常識だろうが、アホ。最近見ないと思ってたのにな。キョウヤ達から相談されてな』

まったく覚えていないが、どうやらあの男達から色々と盗んでいたらしい。

同じようなことを何度も繰り返してるから、覚えているはずがない。俺にとっては皆同じカモなんだから。

『だいたい、キャラ何か作っては消しだからいちいち覚えてないんだって』

『根っからの詐欺師みたいだよな、お前』

『悪かったなあ。俺はこういう奴なんだよ。で、カズヤはどうなんだよ感想』

『ん……ああ、PKの感想か。そうだな……お前に限ってなら、すかつとするかもしれないな』

『うっわ、この人殺し。サイテーなやつめ』

『お前にいわれたくはないって、この殺人鬼め。今までにいったい何人殺した？』

『さあ、な。覚えていられないくらい、たくさんってことだけは確かだぜ』

『そういえば……キヨウヤ達も喜んでた。やっと憂さ晴らしができたって』

『ったく今日はまんまとやられたからな……今度やりかえしてやるって言っとけ』

『いつまでたっても終わんなさそうだな……リアルでは、殺したりするなよ?』

『わかってるって。ってか、これって人殺しになんのかな』

『さあ……オレもさっきお前のこと殺したからなあ……何ともいえない。確かなのは』

『——イカレてる』

まったく同じ文字が画面に浮かび上がって、俺は苦笑した。

その後しばらく話をしてから、俺はP Cの電源を切りディスプレイを外した。

ネットだろうがリアルだろうが……どちらにせよ俺はきっと人殺しき——

(後書き)

はい、SSでした。

オンラインゲーム上でのお話という設定でした……
へっぽこですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1531j/>

mader?

2010年10月8日15時24分発行